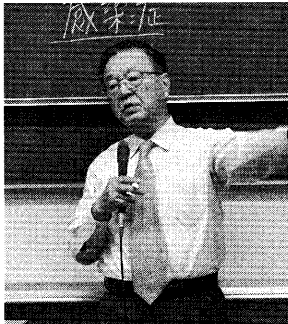


渡邊民朗 教授



主なご経歴

- 昭和33年3月 東北大学医学部卒業
- 昭和38年3月 医学博士（東北大学）
- 昭和38年4月 （財）厚生会仙台厚生病院 内科医師
- 昭和40年2月 東北大学抗酸菌病研究所 助手
- 昭和52年5月 東北大学抗酸菌病研究所 教授（東北大学医学研究科教授兼任）
- 平成4年4月 東北大学抗酸菌病研究所長（平成5年4月より加齢医学研究所）
- 平成8年4月 東北大学名誉教授
- 平成10年4月 岩手県立大学社会福祉学部 教授
- 平成14年4月 岩手県立大学 国際社会人教育センター長兼任

モネが教えてくれた民朗先生

渡邊民朗先生に初めてお目にかかったのは開学の数ヶ月まえである。

どう見ても気が短そうである。しかも同じ介護コースである。加えて間の悪いことに私はコース主任を仰せつかつていたのである。「…ドウシヨウ…」これが第一印象であった。

しかしながらこれまでの6年間、叱られたことや怒ったご尊顔を拝したことは一度もない。別段私どもが立派だったわけでも先生の気が長かったわけでもない。思うに、先生がただひたすら我慢しつつ、学生以外の「子どもたち」（教員）を見守っていて下さったのである。

先生は、東北大学で医学を修められ、さらに3年ほどアメリカで遊ばれた後、母校医学部の教授（現・名誉教授）となられ、同大の加齢医学研究所の所長を歴任された碩学である。

「これからは癌や痴呆といった加齢による病態にこそ医学が取り組むべき課題がある。」との卓見のもと、それまでの感染症中心の「抗酸菌病研究所」を「加齢医学研究所」に改められ、初代所長をつとめられた。現在は、癌や遺伝子の研究をはじめ「テラヘルツ…」とかいうよくわからない研究をなさる一方で「教養教育は大変だ。自分で最新のことを勉強してしかも分かり易く話さなければならない。不確かなことは言えないんだ。」とおっしゃりつつも楽しそうに、とても人の棲家とは思えないような本だらけの研究室で勉強しておられる。

短気にして頑固、良く言えば誠実で純粋なのである。そしてそのような研究者・教育者としての先生のお姿が「学問に、研究に真摯であれ。学生に寛大であれ。」という誠めを無言のうちに私たちに与えて下さっていたのではないかと、今、しみじみ思う。

しかし先生は単なる象牙の塔の人ではない。酒とともにモネをこよなく愛する粋人でもある。酒との関係は分かる。だが、先生とあの「睡蓮」の穏やかさとを結びつけるには若干の時を要する。でも次第にそこに先生特有のソフィストケイトされたエレガンス（知的に洗練された優雅さ）とでもいうべきものが見えてくる。それが民朗先生なのである。だから「隠れ民朗ファン」という女子学生が結構多い。べつに隠すこともなからうと思うが照れくさいのだろう。気持ちはよくわかる。一方、コンパの席で女子学生に囲まれて戸惑いつつも懸命にお作りになるやや硬ばった笑顔も絶品であった。なんとも初々しい組み合わせではないか。

短気でもあり、頑固でもあり、純粋でもあられるが、要するに純情で優しいのである。

大・民朗先生が退かれる。さびしいかざりであり、多くがそう思っているにちがいない。

6年間、先生は、じつに多くのことをお教えくださった。研究への厳しさ、学生への優しさ、そして折にふれて身をもって示された大学教師としてのお姿を忘れずにいたいと思う。

先日は「娘に連れられて一緒に飲んだんだ。」といってメキシカンのバーにご一緒させていただいた。これからもご活躍のかたわらお嬢様とデートし、テニスに興じ、美術館のモネの前でしばし佇まれることだろう。悠々として実に民朗先生らしい、最高の人生である。

ご指導ありがとうございました。いつまでもご壮健であれ、と心から祈るばかりである。

（佐藤 忠）